

報告 中田裕子・朗読 松田有美子

みすず書房ロマン・ロラン全集第4巻『ジャン・クリストフ』片山敏彦 訳

「九、燃え立つ茂み」【148頁~173頁】

*脱却しようとして半月努力したのだが結局それもむなしい努力に終わって、クリストフはアンナの家へ戻ってきた。夜はそれぞれ自分の室のドアにカギをかけて不安な気持ちで閉じこもっていた。

朗読①

しかし、彼らはその時日を決めることを避けた。彼らはいいあった——「明日は、明日は……」と。そしてその明日からは眼をそむけた。とは言え死ぬほかないような事態が彼らを締めつけており、その輪は彼らを包んでぎりぎり狭まって行った。

最も嫌な気持ちは、ブラウンが事の真相を知った時にどれほど悩むだろうと思うその不安にあった。

朗読②

クリストフはまた重ねて嘘をついてしまったことのために心が押しひしがれた。彼はアンナのところへ急いで行った。昂奮のために吃りながら、アンナに事情を話した。アンナは暗いおももちでそれを聴き、そして言った——「よろしいわ。あの人が知るといいですわ。かまいわしません」「どうしてあなたはそんなふうにお言いになれるのですか？」とクリストフは叫んだ——「どんなことをしてでも僕はあの人を悩ませないようにしたい」しかし、そのすぐ後でクリストフが、自分はもうどうしてもこのままでは居られない気もちだからすべてをブラウンに告白しに行くと言った時、彼女はクリストフの良心のことなどはどうでも構わない、とにかくブラウンは何も知らないでいなければならないのだと叫んだ。そして、もうすぐにブラウンが万事を知るだろうということは、クリストフ以上によくアンナがわかっていることだった。

*この都市に生活する者は誰でも、自分の生活が人々の眼から隠されているとうぬぼれるわけにはいかなかった。自分がしたこと、言ったこと、見たもの、食べたものまで他人が知っている。それどころか、考えたことまでも知られているし、知られたことにされてい

る。しかも他人の考えの奥底を穿鑿し、そしてもしもこれらの考えが一般の世論にとって気に入らないものだとすると、その考えの持ち主を詰問する権利を誰でもが持ち合わせている。アンナが二回つづけさまに日曜日の教会の礼拝に出なかったことだけでも、人々に疑惑を起こさせるに十分だった。翌日からアンナは、数か月以来彼女が会ったことがなかったような人々の訪問をうけた。二三の客は、殊更に何くわぬ態度を装いながらクラフト氏についての近況をたずねた。数日後に——牧師自身が訪ねてきた。そして立ち去り際に言ったのは、良からぬ交際の危険と、或る種の散歩と、神をなみする精神と、ダンスの卑猥さと、不潔な欲望とへの、仄めかしであった。——アンナの心には当てこすりのためにぞっとさせられた気持ちが残った。世間の好奇心は今や待ち伏せをしながら、アンナとクリストフとが危地に陥るのを今か今かと待ち構えており、二人の様子に鶺鴒の目でひそかに窺っていた。黙りこくっていて腹黒い都市は獲物を狙う猫みたいに彼ら二人をつけ狙っていた。さて、陰口が公然と広がるための機会を得るときが来た。謝肉祭の日が迫って来た。謝肉祭は、この当時にはまだ、旧来の無遠慮と荒っぽさとの風習を失くしていなかった。

朗読③

アンナの女中は四十を超えていた。その名はベビーであった。ベビーも信心家であり信者の努めをきちんと果たし、家事の義務についても、清潔さと、非のうちどころのない品行と、非の打ちどころのない料理とにおいて申し分がなかった。要するに、彼女は、模範的な女中であると同時に、腹黒い召使の典型でもあった。

クリストフが戻ってきた日の夜、再びクリストフには会うまいと決心していたにも関わらずやっぱりクリストフのところへ行った。クリストフの室の入口に近いところで、はだしの足に、いつもの冷たく滑らかな床板の感触ではなしに暖かい粉を踏んづけるのを感じ、それが柔らかくつぶれるのを感じた。アンナはちっともためらわなかった。ものおじしないで歩いていった。しかし戻り掛けには、自分が歩いた後に灰に残った足跡を暖炉用の箒で念入りに消した。一翌朝顔を合わせたとき、二人の様子はいつものとおりで、一方は無表情であり、他方は相変わらずの笑顔であった。撒かれた灰のたぐらみの罨をアンナが見破って無効にさせた翌日に台所に入ったときいきなり眼についたのは、ザーミが手に持っている小さな箒だった。アンナはその箒を元の場所へ戻しておくのを忘れていたのだった。ベビーは自分の主人の眼つきを窺いながら、わざとらしいほどの笑顔を見せ、そして説明した——「箒がこわれておりますんで、ザーミに修繕を頼みました」そんな見え透いている嘘を、アンナは摘発するだけの手間をかけようとする気もしなかった。その言葉を

聞き取りさえしなかったふりをした。しかし、ドアを閉めるやいなやすべての自信を失った。彼らは灰の物語を公衆の前に持ち出すつもりがちがいない。きっと、そうに決まっていると観ていた。このときからアンナの覚悟は決まった。

謝肉祭に先だつ水曜日の夕方ブラウンは、往診によばれて、翌朝にならないと戻らないはずだった。彼女は心ひそかに決意していることを遂にその晩に決行するつもりであった。クリストフはまさにこの晩を、アンナと決定的に相談を決めるために使おうと思っていた。アンナがそれを促したら彼もその約束を果たすつもりであった。夕食後に、アンナの室へ上がって行くための瞬時を待ち受けていた。しかしベビーはクリストフから注意をそらさなかった。聞きなれているベビーのいびきを聞くとすぐにアンナのところへ行った。心配な気持ちに駆り立てられた。戸口まで来た。ドアは閉まっている。返事がない。……或る臭気が彼を驚かした。それはガスの臭気であった。全身の血が一時に凍る気持ちだった。……彼は無言で懸命の力を込めて一枚の扉を押した。よく締まっている。……最後の螺旋がとうとう取り除けられた。錠は、木材を挽くときのようなきしむ音と共に外れた。

朗読④

そこで彼女は、それまでクリストフに話さずにいたことのすべてを手短かに話した——ベビーのスパイ的なやり方、灰、ザーミとの情景、謝肉祭、差し迫っている面目失墜。クリストフは落胆した。彼は寝台の脇にぐったりとひざまずいて、顔をアンナの顔に押しつけていた。——彼らは無言のままだった。アンナは歯をガタガタ鳴らしてふるえながら、両腕を胸に押しつけ、膝を顎の下まで立てて、からだを縮めて座っていた。彼は窓を閉めて、寝台に腰かけた。アンナの冷えきっている両足を両手に握って、両手と口とで温めた。アンナはそのために心を打たれた。

朗読⑤

*その朝ブラウンが帰宅したとき、アンナは依然、虚脱の状態にいた。何かただならぬことがあったのだということはブラウンによく判ったが、しかし彼はベビーからもクリストフからも何一つ聴きだすことができなかった。アンナは少しも動かず、眼をつぶったままだった。脈拍がほとんど聞き取れないほど弱かった。ブラウンはアンナの病床に付ききりだった。彼は食事を撮ろうとしなかった。 金曜日アンナは眼をひらいた。ブラウンは話しかけたが、アンナは彼がそこに居ること無頓着だった。正午ごろブラウンは、彼女の

瘦せた頬の上を大粒の涙が流れ落ちるのを見た。晩になってアンナは口をきき始めた。とりとめない文句であった。

朗読⑥

これらの二日のあいだ、クリストフは孤独のうちに過ごした。ブラウンはアンナのための心痛が余りに大きかったためにクリストフのことを念頭にうかべなかった。一度だけアンナに、クリストフに会って話してみたらどうかとたずねた。アンナの顔に現れた驚愕と拒絶との表情があまりにも強かったために驚いたほどだった。それからはもうクリストフの名は口にだされなかった。クリストフは自分の室に閉じこもりがちだった。心配と恋情と、良心の呵責とが彼の心の中で衝突し合い渦巻いて悲痛な混沌を作っていた。ブラウンとアンナとが午後に出たとき、クリストフは窓のカーテンの陰に隠れて、二人をのぞき見た。あんなにまっすぐな、誇らしい姿勢だった彼女が、猫背になり、頭が前かがみになり、顔色は黄いろっぽくなっている。アンナの姿を見つめながら思った——「この自分の仕わざなのだ！……彼女をあんな姿にこの自分がしてしまったのだ！」どうしてももう今晚は、アンナと同じ屋根の下で過ごすことに耐えきれないと彼は感じた。「あの人をこの自分から救わなければならない！……」意思の力が息を吹き返した。テーブルの上に散らかっていた紙類をかき集めて紐でしばり、帽子と外套をつかんで家を出た。駅に来た。汽車に乗った。次の駅からブラウンに手紙を書いた。小駅で下車したのは夜だった。駅前の最初の宿屋にはいった。アンナの身に迫っている危険のことが心配になってきた。世間の悪意をどうにかしてもみ消して、その狙いをはずさなければならないと、そのことばかり考えていた。手紙を書こうと思いついたが、それはあの町でクリストフがいくらかの交友関係を持っていたクレープスであった。世間一般の考えを方向転換させるために、その手紙の終わりに、ブラウンについて、アンナの病気について、きわめて冷淡に見える文句を書いておいたのだった。

朗読⑦